

〈実践研究〉

小諸カリキュラムの挑戦 -Use English and Challenge the World!-

渡邊時夫 小諸市教育委員会
折橋晃美 小諸市立東小学校

キーワード：カリキュラム，外国語教育強化地域拠点事業，小中連携

1. はじめに

小諸市は平成26年度から小学校と中学校の英語教育に関する小諸カリキュラムを作成し、実施してきた¹。カリキュラムは、外国語習得の考え方（渡辺・佐藤・粕谷，2010）を参考にして、実際の授業において子どもや子どもに分かり易く、また意味のあるインプット（comprehensible and meaningful input）を十分に与えることを大切に考えて作成した（詳細は2.1参照）。子どもがその英語のインプットを理解し、次第に自ら英語を使って自己表現できるようにすることをねらいとした。平成27年度からの3年間は、文部科学省の英語教育強化地域拠点事業（平成29年度は外国語教育強化地域拠点事業に名称変更されている）の指定を受け、外国語をコミュニケーションの手段として、グローバル社会を積極的に生きる子ども達の育成をねらいとし、小学校、中学校、高等学校が連携し、英語教育の改善を進めてきた。具体的には、小学校中学年から外国語活動を開始し音声に慣れ親しませ、小学校高学年では学習の系統性を持たせる観点から教科として位置付け、中学校では原則、授業は英語で行い、高等学校では幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う能力を高めることを目的として研究を進めてきた。

また、毎年、授業実践を通して、小諸カリキュラムを見直し、当初のねらいが一層的確に実現されるよう改善に取り組んできた。執筆者2名は、小諸カリキュラムの整備及び文部科学省の委託事業の推進に関わってきた²。本実践報告は、小諸カリキュラム及び英語（外国語）教育強化地域拠点事業における取組を紹介することを目的とする³。

2. 小諸市の取り組みの概要

2.1 小諸カリキュラム

CAN-DO リスト形式の学習到達目標を小学1年生から中学校3年生まで4技能（聞く・話す・読む・書く）を小中合同で定めた。学習到達目標は、「学習活動」に取り組むことではなく、自分の考えや気持ちなどを伝えあう「言語活動」で英語を運用できることであるという共通認識をもって、子ども達にも教師にもわかりやすい学習到達目標のリストを作成した。また、学習到達目標達成のための「活動」をそれぞれの学年で明示してあり、その活動に必要な言語材料や表現などを、学年に応じて10～14 ぐらいのユニットで

学べるように、それぞれのユニットのテーマを設定した。

英語教育強化拠点事業の最終年度においては、表 1 に示す時数で外国語活動や外国語科を実施することになった。なお、5 年生と 6 年生は、教科として位置付けられた。

表 1. 年間の授業時数

学年	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生
時間数	10	20	35	35	70	70

小諸市では、5 学年と 6 学年が教科として位置付けられることについて、「外国語活動」の主たる目標を継続することを基本とするとともに、次のような原則を設定した。

- ① 英語の音声に十分触れて、聞いて分かることを基本とする。
- ② ことばや文化に関して様々なことに気付くこと (awareness) を大切にする。
- ③ 活動などに積極的に参加する態度の育成を図る。

さらに、教科として英語を教える高学年の授業においては、単に聞いて理解するに留まらず、基礎的・基本的な言語材料を「習得」する（積極的に使える）ことを目標とした。

カリキュラム作成に当たって、生活に根ざした言語材料を多用し、子ども達にとってのわかりやすさや興味・関心を重視して選択・提示した（文部科学省，2008）。新しい表現や語彙の導入を控えめにし、既習の言語材料を新たな多様な場面で繰り返し使うよう配慮した。また、文法中心でなく、表現・語彙の学びやすい配列を大切にし、できるだけ身の回りの事柄に関する題材との関わりを考え、理解・表出の学力の習得を大切に考えた。

指導にあたって、教え込むのではなく、“Use English” をキャッチフレーズに「使うことによって英語使用力を習得させる」をねらいとした。思考・判断・表現する中で、英語を用いる力を身に付けていくという Active Learning をねらっている。特に、授業を進めるのにあたっては、英語を聞き、考え、判断し、決定し、表現するという流れ《 Listen ⇒ Think ⇒ Judge ⇒ Decide ⇒ Express 》を基本とした。

2.2 授業の進め方

小諸カリキュラムにおける指導体制は、1 年生から 4 年生までは全ての授業を、高学年の授業では 75%（年間およそ 50 時間ほど）の授業を学級担任 (HRT) が外国語指導助手 (ALT) と Team-Teaching を行うことになっている。Team-Teaching は次のように進められている。

授業の進め方としては、まず、ALT と HRT とで Teaching Plan を話し合って作成する。授業では、開始前に、HRT が黒板に Today's Plan (あるいは Today's Menu) を英語で板書する。HRT が板書することのねらいは、HRT の英語使用力向上と、子どもに授業の中身を知らせ、心の準備をさせることである。黒板の Today's Plan を見ながら、ALT から HRT に問いかけ、本時の授業の概要を短時間で子ども達に知らせる。HRT に尋ねるのは、HRT が授

小諸カリキュラムの挑戦

業の責任者ということに配慮してのことである。

授業が始まり、英語の活動に入る前には、必ず、HRTとALTとで活動のDemoを行う。続いて、授業者の一人と子ども（volunteers など）とで行い、活動が複雑な場合は、さらに数名の子ども同士でDemoを行うことにしている。こうすると、HRTが英語を使う機会が自然に増え、活動について子どもの理解が深まると同時に、listeningの力が向上するという利点がある。

授業の終わりには、振り返り（Reflection）を行い、HRTが日本語で、子どもに気付いて欲しい点、記憶に残して欲しい点を短く述べることもある。こうすると、子ども達の発言の質が高まり、言語や文化の気付き（awareness）が高まってくるのが分かってきた。ALTは、単に、goodやexcellentなどのほめ言葉だけでなく、必ず子どもの良かった点や大切な点を分かり易く端的に述べることにしている。

小諸市では、このように、授業を進めながらHRTの英語力をアップさせることを重視し、“授業が道場”をキャッチフレーズに、下記の枠組を考えて日々の指導を実践してきている。

2.3 二つの組織

拠点事業を始めるに当たり、二つの組織を立ち上げた。小諸市英語教育推進委員会とALT MEETINGである。

(1) 小諸市英語教育推進委員会

文部科学省委託事業を推進するために、英語教育推進委員会を設定した。それは市内のすべての小・中学校、高等学校1校から各1名ずつの推進委員とすべてのALT、市の指導主事、英語教育推進リーダーで構成され、2ヶ月に1回開催された。各学校で、小諸カリキュラムが定着しているか、問題点はないかを確認し、それぞれの学校での新たな教材や指導法などを検討した結果を共有するよう努めてきた。学校間の連携を密にすると共に、研究発表や問題解決を図った。

各学校内においては、推進委員は英語部会を設定し、校内における英語教育の在り方を研究し、また、その検討会の内容や決定事項は、素早く全校の教員に周知している。推進委員会には高等学校からの参加もあり、情報を共有できる利点はあるが、高等学校との連携、接続は非常に困難を極めているのが実情である。

(2) ALT MEETING

ALTに関して、小諸市は授業の中でコミュニケーションを主たる活動とすることが必要であると考え、ALTを活用することでその実現に努めてきている。そこで、ALTを独自採用した。小学校6校に4名のALTを、2つある中学校にはそれぞれ1名ずつのALTを配置した。ALTについても、指導が大切であり、すべてのALTが参加するALT MEETINGを毎月開催し、指導主事の指導の下、ALTの指導力アップを図ってきた。

2.4 授業参観

市内すべての小学校に共通のカリキュラムに基づいて授業を計画的に進め、指導主事と英語教育推進リーダーが連日授業を参観し、その都度、授業者に日本語の文書でコメントを、ALTには英語の文書でコメントを送り、校長を通して授業者に渡した。そのような仕組みは拠点事業を開始した時から継続してきた。

2.5 文字指導

音声面については、指導の対象が若ければ若いほど、耳が音をとらえたら、そのままの音で記憶してしまうため、正しい音声で個々の音 (individual sounds), rhythm, intonation などについて、従来以上にしっかり指導しなければならない。例えば、日本語には「ア」という発音は一つしかないが、英語では, father, mother, cat, birthday など下線部は、すべて別の音素である。また、子音についても、例えば「破裂音」と呼ばれる (/p/, /k/, /t/) については、日本語の音とは、大きな違いがある。小学校卒業までには、徐々に、この違いを正しく教え、The younger, the better. と言われる発音指導の分野で、成果を上げたいと期待した。指導主事が、5 学年と 6 学年を対象にすべての学校を回り、日本語と英語の発音の違いについて指導した。

文字学習についても、単に個々のアルファベット文字や単語の理解だけでなく Reading や Writing といった質的に高い指導の導入も必要である (後藤, 2005)。小諸市では、3 年生からアルファベットの導入を始め、4 年生の学年末にはアルファベットの大文字と小文字の 56 文字のほとんどを聞いて書けることを目標としてきている。

また、指導法としては、文字の形の相違を印象付けながら指導し、子どもが認識できるように、できるだけ大文字と小文字を一緒に教えることを推奨した。授業の中での文字学習の扱い方については、授業の最初に少しずつ工夫しながらモジュール式に扱うことを原則とした。5 年生で扱う基本的な語、6 年生で扱う基本文は、tracing (なぞること) したり、copying (見て真似て書いてみる) したり、他者 (教師など) の書いたものを、声を出して読むといった学習も大切にしており、1 時間の中でたっぷり時間をとって練習する授業もある。

文字指導においては、Phonics (フォニックス) を十分に活用することを原則としたが、フォニックスだけに限定せず、様々な工夫が必要であろう。音声指導の場合と同様、文字学習においても、①文字に触れ、読めるようになる、②tracing (なぞること) による練習、copying (見て真似て書いてみる) という学習を通して読み・書く力を育てることを重視した。

小諸カリキュラムの挑戦

文字指導には小諸市で統一して必ず3線の罫線を使っている。4線の罫線はアルファベットの小文字g j p q yのたった5文字に対応しているだけで、かえって子ども達にとっては混乱の原因になっていることが伺えた。小諸市では、小学校3年生から英語を書き始め、3線ノートで練習している(図1参照)。英語学習の初期段階の子どもにとっては3線の方がわかりやすく、教師にとっても教えやすい。

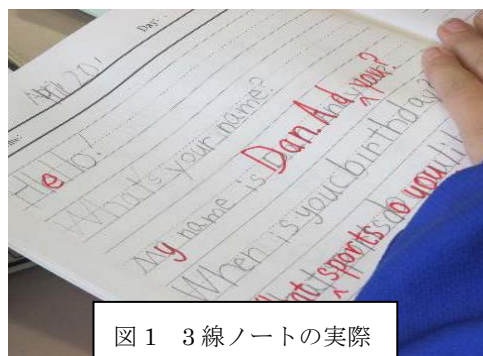


図1 3線ノートの実際

特に3年次は、Reading & Writing用のシラバスを作成し、毎年修正を試み、授業の実態に合うよう改正すると共に、CAN-DOリストとの関係についても改善を図ってきている。小学校3年生からの文字指導にあたり、とにかく「ストレスなく」ということに一番の重点を置いてきている。毎時間の授業の中で扱うのは、どんなに長くても5分であるとしている。

文字を書くことにあたっては、小学校3年生のローマ字指導でも使えるように従来の4線の罫線を見直し、3線でワークシート等をつくることを市内で統一した。英語の学習を積み重ねたり、家庭学習に対応したりするためにも、3線のノートを作成した(『音がとびでる 英語3線ノート』信教印刷)。

平成28年度、3線の罫線を導入したときに子ども達に「3線と4線の罫線ではどちらが使いやすいか」というアンケートを3年生と5年生でとったところ、3年生68名中61名(89.7%)が、4年生66名中62名(93.9%)が、3線のほうが書きやすいという結果が得られている。罫線が一つ少ないだけでも、子ども達にとっては文字の書き出しがわかりやすく、文字を書く負担が軽くて済むと考えられる。中学校年用と高学年用の2種類のノートを製作し、クイズなどのワークのできるページには音声でも練習できるように、QRコードをつけた。SNSの端末で小諸市のホームページに即接続し、聞き慣れたALTと画面を見ながら練習できるように設定してある。

3. 課題

3.1 指導法について

文法を中心とした授業の中で、Accuracyを重視し過ぎて、「英語を使って成し遂げる」ような活動はほとんど仕組めていないのが実情である。教員が日本語ばかりを使っているような授業から、全員が常に英語に触れ、英語を使って活動しているような授業へと質的な転換を図っていかねばならない。

3.2 小中の接続を円滑に

小諸市は5年ほど前から英語教育に独自に取り組んできている。子どもが受ける外国語教育の授業時数は増加している(表2参照)。例えば、平成29年度新入生は、小学校6

年間で合計 240 時間英語を学ぶことになる。小学校では、この時間のほとんどすべての授業が HRT と ALT の Team-Teaching で行われており、英語に触れたり、考えながら英語を使用したりする機会が増えている。この状況を踏まえ、小中接続を円滑にすることが課題として意識されるようになった。

表 2. 中学校入学までに子どもが受ける外国語教育の時間数（単位時間）

入学年度	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合計
27	10 時間	10	35	35	35	35	160
28	10	20	35	35	35	70	205
29	10	20	35	35	70	70	240
30	10	20	35	35	70	70	240

3.3 パフォーマンスの評価について

個々の子どもの学力の実態を的確に把握するだけでなく、教師の指導法についてもヒントが得られるような工夫が求められている。評価の観点の設定についても、小・中学校のそれぞれの段階で、どのような観点で評価すべきかについて、常に検討しつつ改善に努める必要がある。

ALT が個々にインタビューする方式や、子どもに 5 文程度の自己紹介をしてもらい、ALT がその自己紹介に対して 2 つから 3 つの質問をする方式、さらには、ドラマを子どもに作らせて発表させたり、show and tell のような形で自分の大切な物を発表させたりした。

3.4 教員研修

英語を学ぶことができる教員研修の必要性を考え、文部科学省委託事業の初年度である平成 27 年度には学校ごとに年 2 回ずつ指導主事や英語教育推進リーダーが指導を行った。教員の多忙さを無視することはできないが、事業を進めていくにあたり、HRT が授業を行うことが多くなり、小学校の教師にとって英語を使えるようになることは急務である。さらなる研修会を行う必要があるという課題が生じてきた。

4. 課題解決に向けた取り組み

4.1. 小中接続・小中連携のために

(1) 小中英語担当者検討会

授業時数が毎年増加すると共に英語力も向上している新入生を迎える中学校においては、入門期の指導の在り方に特別な配慮が必要である。平成 29 年 3 月に小中の英語担当者が検討会を繰り返し開催し、中学校 1 年生の入門期指導について、指導内容と指導法について再検討し、互いの理解を深めながら決定していった。表 3 は H29 年度に実際に行った指導計画である。

小諸カリキュラムの挑戦

表3 中1 年間指導計画 4月 小中接続を意識して

時間	目標	主な活動	領域	備考
1	「授業開き」 英語学習の 進め方を知る	<input type="checkbox"/> 教師の英語を聞いて、T or F や Q&A に 反応したり、答えたりする。 <input type="checkbox"/> 違う小学校から来た友達に自己紹介をする。 <input type="checkbox"/> 英語授業の進め方や約束事を知る。	聞く 話す（やりとり） 話す（発表）	
2	小学校の英語 を思い出そう！①	<input type="checkbox"/> 教師の英語を聞き Are you ? を思い出す。 <input type="checkbox"/> 「指導書別冊：アクティビティ Unit1②」 Are you ? を使ってインタビュー活動をする。	聞く 読む 話す（やりとり）	Handout
3	小学校の英語 を思い出そう！②	<input type="checkbox"/> 教師の英語を聞き Do you ? を思い出す。 <input type="checkbox"/> 「指導書別冊：アクティビティ Unit3①」 Do you ? を使ってインタビュー活動をする。	聞く 読む 話す（やりとり）	handout
4	アルファベッ トを思い出そう	<input type="checkbox"/> 「小中接続編 10～13ページ」で文字を探す。 <input type="checkbox"/> 「小中接続編 10～13ページ」で文字を書く。 <input type="checkbox"/> 「小中接続編 10～13ページ」で文字を読む。	読む 書く 聞く 読む	handout
5	フォニックス を思い出そう	<input type="checkbox"/> 「小中接続編 22, 23ページ」で文字を書く。 <input type="checkbox"/> 「小中接続編 24, 25ページ」で文字を書く。 <input type="checkbox"/> 「小中接続編 28, 29ページ」で文字を書く。	聞く 書く 聞く 書く 聞く 書く	handout
6	語彙を思い出 そう	<input type="checkbox"/> 「小中接続編 34ページ」で単語を探す。 <input type="checkbox"/> 「小中接続編 36～39ページ」を使って、色 や国名、数字や曜日や月名を思い出す。	読む 聞く 書く	handout
7	習った表現を 思い出そう①	<input type="checkbox"/> 「小中接続編 42～45ページ」で今まで 習った表現を思い出す。 <input type="checkbox"/> 「小中接続編 46ページ」で自己紹介文を書く。	聞く 読む 話す（やりとり） 書く	handout
8	習った表現を 思い出そう②	<input type="checkbox"/> 「指導書別冊：リーディング1」を読んで、各問 いに答える。 <input type="checkbox"/> 今までの7時間で思い出した表現を使って、なる べく多くの文で自己紹介をする。聞き手も発表者 に質問し、発表者はその質問に答える。	読む 話す（発表） 話す（やりとり）	handout

中学校では教科書いきなり入ることはせず、小学校で使用した教材や内容を復習しながら、中学校への接続を図ることに重点を置いた授業を行った。現在も、小学校で扱っ

てきた言語材料を中学校の教員が理解しているため、既習、既存の知識を引き出しながら、さらに新しい語彙や文法とミックスし、結びつけて中学校における初期の新たな英語教育にある程度成功している。

平成29年度に入学した小諸市内2校の中学校の1年生（300名）に英語学習についてのアンケート調査を行った。まず、「中学校に入学して、すぐに英語の授業に馴染めたか」を問うたところ、「すぐに馴染めた」（60%）「抵抗は少なかった」（31%）「抵抗は大きかった」（9%）という回答が得られ、多くの子どもが「馴染めた」と回答している。小学校での英語の学びが、中学校での英語学習の抵抗を小さくさせていることがうかがえる。

さらに、「どのような点で抵抗を感じるのか」を自由記述で問うてみたところ、表4に示すように、子ども達の回答はで7つの項目にわかれた。

表4 抵抗を感じる点

項目	割合
① 英語を読んだり書いたりすることが多く難しく感じた	52.3%
② 文法用語についての説明が難しい	9.9%
③ 授業中、先生が英語ばかりで話している	6.3%
④ クラスメイトの前で指名され、英語を話すことが多い	5.3%
⑤ 先生の話す英語がわかりにくい	3.7%
⑥ ペアワーク・グループワークが小学校に比べて少ない	1.8%
⑦ 先生の日本語による説明が多い	1.7%

上記①、②、③、⑥は小学校での学習態勢との違いに起因する事項であることがうかがえる。座学中心の受け身な学習態勢に子ども達の大半が抵抗を感じている。子ども達にとって、中学校という新たな環境の中、ただでさえ緊張感をもって臨む生活の中で、④の「指名され、英語をクラスメイトの前で話す」ということに抵抗を感じている子どもは、⑥のペアワークやグループワークの中であれば、抵抗なく話せるという記述があったことも付け加えておきたい。

次いで、③や⑤の中学校の教師の英語使用については注目に値する。教師が英語を使用していればいいのではなく、子どもの理解できる英語を授業では使えるよう、教師は研究する必要がありそうだ。②の「文法用語の説明」は必ずしも英語でというわけではないのかもしれないが、文法の扱い方を再考する必要があることがわかった。

(2) CAN-DO リスト一貫性を検討

もう一つの要因として、昨年度まで小学校は小学校用の、中学校は2校でそれぞれ作成し使用してきたCAN-DOリストを、子どもの実態に即して、市内共通の小中9年間の一貫したCAN-DOリストを現場の教師達の度重なる協議に基づいて作成した。むろん、まだまだ改善の余地はあるが、CAN-DOリストによって義務教育の9年間の英語教育を一気に見

小諸カリキュラムの挑戦

通せることは小中両校の教師達にとって非常に有益であった。小学校の教師にとっては、小学校段階で何をどこまで学ばせるのかが明確になり、中学校の教師にとっては、今までとは確実に違う学びをしてきている子どもを受け止めるためには何が必要であるかがある程度見通せることができるからである。

4.2 プレゼンテーションとやりとりの力を同時に測るテストについて

小諸カリキュラムの「話す」能力をどうはかるべきかを、高学年の教師や ALT MEETING などで検討し合い、CAN-DO リストに基づいて、スピーキングテストを作成した。全市 6 年生を対象に実施した。「話す」能力は presentation や recitation といったスピーチをする力と、conversation skills という一言でまとめられるような、independent production, free talking, さらには real communication といったやりとりをする力と、二つの力を同時に測られるようなテストを試みた。その際には、子ども達が自ら話したくなるような内容や、雰囲気作りを教師側は心がけ、テストでは子ども達の緊張を可能な限り和らげるようにした。

中学校では、いわゆる memorized speaking だけでなく、impromptu speech にも重きを置き、音読の力と併せて、日常の授業を工夫し、期末試験の一部としてこれらの評価を実施している。

4.3 教員研修

(1) 教師の意識調査を実施

教員の英語指導に対する意識を高め、子どもの評価のみならず教員の自己評価に役立ってきた。「英語力は向上しましたか」という問いに、昨年度、中学校年、高学年を担当した HRT は低学年を担当した HRT と比べ、英語力がアップしたと感じている傾向がはっきりした。これは高学年になると授業数が増えるためであり、「授業が道場」の実践の効果を示している。英語力向上の鍵については、ALT との授業の打ち合わせの時に、また授業を進行していく時に英語を使わざるを得ないので、やはり、その時が成長のチャンスだと捉えている教師が多いようである。

「自身の指導力をアップさせるためにどのような機会が欲しいか」という問いに対して、47 名 (52.8%) が「校内研修会を開いてほしい」と回答した。次いで多かったのは無回答 (28%) であった。また、「ALT と接する機会を多くもつ」(7.8%)、「互いの授業を見あったりする」(4.4%) であった。つまり多くの教員が校内研修会の必要性を訴えたことになる。市教委が主催で、市内の HRT を対象に、研修会を年 3 回に行うことにした。平成 28 年度から 29 年度にかけては、英語教育推進リーダーによる研修会を行った。

中学校段階では、特に、Classroom English だけでなく、All in English で授業を進められるように、どんな研修をするべきか、小学校を含め様々な実践を通して検証しなければならない。

(2) 研修内容

研修には Classroom English, 英語の歌, アルファベットの扱い方, Working with ALT, Content-led project などを取り入れて来たが、HRT が研修の度、常に主体的に取り組めるの

が Book reading であった。

ペアになり、英語の絵本を選び、読み聞かせを別のペアと交互に行ったあと、お互いの Feedback をするという手順だが、多くの教師は授業本番さながらに、様々な手法で絵本の世界に子ども達を引き込んでいくことを学んだ。この研修から生まれたのが、“Book reading for 1 年生”である。高学年の子ども達が低学年の子ども達に絵本を読み聞かせるという試みである。自ずと相手意識の芽生える活動であり、英語を使う必然性がある活動であると考えられた。低学年の子ども達に、良き英語学習者のモデルを示すチャンスにもなると思われる。

5. さらなる課題

5.1 対話をひろげていくために

Do you like music? Yes, I do.などの一問一答でなく、対話をひろげていくことなどの指導の必要性が求められている。And you? How about you? Me, too. などのフレーズを使ったり、and や butを導入したりして、表現力の幅を広げる試みも実施した。その結果、HRTとALTによる下記の例にみられるように、対話が続き、意味のあるcommunicationが可能になった。

5.2 子どもも教師も伸びる評価

教師が子ども達一人一人の課題や特性を捉えたうえで、個別に対応を深めながらも、子どもと共に到達したい目標をもって授業にのぞみ、そういった授業の中で、子ども達の学びはどの深まったのかという、子どもの姿を語りあえる研究会を多くもつことが望まれる。

その研究会では①学習指導と評価の一体化、②評価を自然な形で仕組める場や教材の研究、③ALTと共同作業で行う評価のあり方、④パフォーマンステストのもち方等の検討が必要である。評価のための場や材の研究、さらには子どもの力を定着させるために、子どもも教師も伸びる評価を推進していくことで、授業改善、小中連携をさらに図らねばならない。

6. まとめ

戦後、70年以上にわたり、様々な英語教育に関する理論や指導法が欧米等から紹介された。振り返ってみると、多くの学者や実践家の努力にも拘わらず望ましい結果はいまだに得られていない。英語教育の成果をあげるために費やした莫大な時間とエネルギーはどこへ消えてしまったのだろうか。

戦後の長い年月における英語教育の軌跡を振り返ってみた時、日本の英語教育の進展を阻んできた主な要素を明確に指摘することができる。それは、(a)英語教育の最も大切な目標がコミュニケーションであることを軽視してきたこと、(b) 英語教員自身の英語使用能力が十分でなかったこと、(c) 英語の授業では、教員が質問する人、学習者は答える人という実態が固定し、その不自然さを誰も重大視してこなかったこと、である。

小諸カリキュラムの挑戦

今後を見通したときに、今、この時の英語教育への期待は、日本の英語教育史に刻まれるほどの大きな動きになりつつあるなかで、望まれる英語教育とは、「英語を使って何かができる」人を育成していく営みであることは明白である。教授法を見直し、現実世界における言語使用の実態と、学校における英語指導との乖離を解消できるよう、日々の研鑽を未来ある子ども達と共に積んでいきたい。

注

¹小諸カリキュラムは、小諸市のウェブサイトにおいて公表されている
(www.city.komoro.lg.jp/news/2017082300094/file_contents/curriculum.pdf)

²第1著者は信州大学名誉教授であり、小諸市教育委員会の指導主事を務めている。第2著者は、平成28年に実施された英語教育推進リーダー中央研修（文部科学省委託事業）に参加しており、2年間英語教育推進リーダーとして小諸市の事業に関わっている。

³本実践報告は、第47回中部地区英語教育長野大会（2017年6月24日・於信州大学教育学部）において口頭発表された「小中連携による中学校入門期の英語教育の質的向上を目指す研究」（折橋晃美・渡邊時夫）に基づいて加筆修正したものである。

文献

バトラー後藤裕子（2005）.『日本の小学校英語を考える』東京：三省堂

文部科学省（2008）.『小学校外国語活動 研修ガイドブック』

渡邊時夫・高梨庸雄・森永正治・斎藤榮二（1988）.『インプット理論の授業』東京：三省堂

渡邊時夫（監修） 酒井英樹・塩川春彦・浦野研（編著）（2003）.『英語が使える日本人の育成-MERRIER Approach のすすめ』東京：三省堂

渡邊時夫・佐藤令子・粕谷恭子（2010）.『ここから始めよう小学校英語—楽しい指導の第1歩』東京：明星大学出版部

渡邊時夫・高梨庸雄・斎藤榮二・酒井英樹（2013）.『小中連携を意識した中学校英語の改善』東京：三省堂

（2018年 5月31日 受付）

（2018年 8月 8日 受理）